

永 久 平 和

石原莞爾自筆

第134号
(平成27年10月25日)

目次

巻頭言 オオカミ復活と平成日本の責務 山崎八九生	1
●石原完爾と満州事変 田中良則	2
◆【連載】 蜚気楼の国・満洲国(その2)…… 坂本進一	4
●石原莞爾の「戦後」を歩く④……	6
●昭和天皇の御製⑨ 岩崎章次	8
●法要報告 会員便り	8
●編集後記	12

宣言(昭和31年協和会「昭和革新論」より)

- 1、人類歴史は最終戦争時代に突入し、世界の統一は眼前に迫った。われらは最小の犠牲をもって、新しい歴史を開こう。
- 2、都市解体、農工一体、簡素生活、この三原則によって新日本を建設し、搾取と戦争のない、人類次代文化の先駆となろう。
- 3、東亜に対する過去の態度を深く懺悔し、まず近隣と道義によって固く結び、ひいて永久平和の実現に邁進しよう。

オオカミ復活と平成日本の責務

山崎八九生



平成二桁になった頃から、農山村地域での「増えすぎた」シカやイノシシによる森林や農作物への被害が深刻化していることが都会に生活している人たちの間にもようやく知られるようになってきた。「増えすぎた」原因として、①農山村の過疎化、②猟師の高齢化による狩猟の減少、③農作物の放置と生ゴミの不始末や餌付け、④地球の温暖化による凍死の減少が指摘されているが、その最大原因はオオカミを絶滅させたことである。

また食害の対策にしても、①里山に緩衝帯を設け、田畑との境界線上に柵を設置、②電気柵やトタンなどの防護柵で田畑を囲う、③皮はぎ防止の樹木のネット掛け、④捕獲や追い払いといった、これまでに既に試みられ、その効果の割には、設置や維持管理に莫大な費用と労力がかかり、地方自治体の財政をより一層悪化させる弥縫策しかされてこなかった。そのためいくつかの自治体は、抜本的な改善策は最早オオカミの復活しかないことに気付き初めている。

しかし、ワシントン条約の対象となっているオオカミの再導入には、農水省や環境省などがその重い腰を上げなければならぬが、霞ヶ関の多くの官僚たちの認識はまだそこまでは至っていない。さらに、かなりの日本人がいまだに明治時代のからの「赤頭巾ちゃん」症候群のオオカミ感を抱いたままであるため、オオカミ再導入によるアメリカやドイツの自然の回復やオオカミとの共存の実例、オオカミがヒトを

襲うことは事実上ないこと、家畜への被害も少なくとも日本の場合には殆ど考えられず、たとえあったとしても、現在のシカやイノシシの被害とは比較にならないほどであること一つ一つ示しながら地道に洗脳を解くしかないだろう。

明治時代に日本からオオカミを絶滅させてしまった我々日本人だが、明治以降の急速な近代化の課程の中で犯してしまった罪過のツケが平成になって回ってきた感がある。「光ある所に影あり」のたとえの通り、西洋列強を模倣して近代国家に変貌したことで列強の植民地にならずに済み、日本語と日本文化を守ったことが明治の「光」としたら、他方、山地に囲まれた稲作民族の日本人が、牧畜民族の身勝手なオオカミ感をそのまま受け入れて、これまで「大口の真神」として素朴に崇めてきたオオカミを滅ぼしたのは明治の「光」から生じた「影」である。アトラトルに代表される槍投器や弓矢と言った「飛び道具」の発明、さらにはオオカミからイヌを創り出したことで、人類はスーパーハンターになり、今や地球上に73億超というとてもない数に異常繁殖している。「地球にやさしく」というが、究極の「地球にやさしい」形とは、人類がこの地球上からいなくなることもされない。しかし、それは種としての自己否定の矛盾である。

人類が地球環境にとって有害な存在であるのなら、その有害性を軽減させることこそが現在の人類に課せられた責務であり、そこには人間中心主義と言う意味でのヒューマニズムを越える新たな哲学が求められる。日本におけるオオカミの復活もそのような一例であり責務でもある。

山崎八九生(やまざき・やくお)……昭和29年(1954年)生れ。東京都練馬区在住の行政書士。

本業の傍ら、練馬区役所・暮らしと事業の手続き相談相談員、一般社団法人・日本オオカミ協会監事、世界連邦日本国会委員会(参議院第一別館内)副責任者、石原莞爾平和思想研究会事務長等の役職に就く。

ライフワークとして、軍事問題、旧日本陸海軍兵器、原子力問題の研究を行う。

編集◆後◆記

◆浅学非才な私ではあるが、40年の長きに亘って軍事問題に携わってきた経験上幾つかの確信を得たと自負している。

その例を列記すると、①兵器の発達とは生物の進化に似ている、②「勝利は失敗を隠す」そしてそれが「成功（体験）は失敗の元」となる、③太平洋戦争（大東亜戦争）の敗因は幾つかあるものの、物量差以前に日米の軍事技術力とその運用差によってもたらされた、④戦争は兵器という道具を用いた争いであるから相手より優れた兵器を持ちたがるのは当然だが、そこには大きなパラドクスが存在する、などである。紙幅の関係上、④についてのみ述べたい。

かつての大英帝国は質・量共に世界最大の戦艦保有国であったが、さらに画期的な戦艦ドレッドノートを竣工させたことで、（建造中の戦艦を含め）それまでの各国全ての戦艦を旧式化させ、一次的には更なる優位を獲得した。しかしそのことが列強各国をして超ド級戦艦（我が国の「金剛」もその一艦）の建造に邁進させ、かえって英国の優位を相対的に下げてしまった。原爆開発に成功した米国も同様である。第二次大戦後の圧倒的優位さはその4年後のソ連の原爆実験成功により崩れ去り、その後長らくソ連の核攻撃に怯えることになる。

因みに、私達人類を含め地球の生物たちは「質量保存」の化学反応の世界で生きている。他方、核分裂や核融合は「質量欠損」の核反応の世界

であり、それは生物圏内のできごとではない。故に、私は「地球の一生物」として核兵器と原爆は封印すべき存在だと確信している。

（山崎）



皆様は理論と直観のどちらを大切にしていますか？私は断然直感派です。たとえば、ある人物と一緒に平和活動をやりましようと思いついてきたとします。歴史認識も特に問題はない。思想も似ている。でも何かしら漠然とですが、不安や引つかりを感じる時があります。自分でも説明が付きにくいのですが、この人物はなんとなく信用できないとか、一緒に活動したらまずいのでは。なぜか気が乗らない。そんなときは断ります。このような直観は生まれながら強かったのですが、面接業務などの中でもかなり培われ、さらに異業種の方たちとつき合っていく際に身についていきました。印象、好き嫌い、肌が合う合わない。もはや勘としか言えない部分で判断することが多々ありました。相手は今、何を考え、何を求めているか。言葉だけで判断しかねるものを、相手の表情やしぐさなどの言語情報以外からくみとる。直観的に相手を判断するクセができました。とはいえ、まんまと騙されて酷い目に合わされたこともありました。そんな地獄の支配から解放された瞬間、季節の変化にも敏感になりました。窓の外の光の具合や空気の匂いで四季の変化を感じとる。それ以前はこうしたことをあまり実感

しなかったもので、自分でも驚きました。動物を飼っている人はわかると思いますが、動物は人間が感じるより少し早く地震に反応します。突然、興奮したりおびえたりしているので何かと思っていると、その数分後に地震がきます。人間も昔は動物的な感覚を持っていたはずではないでしょうか。しかし文明が発達してその力が急速に衰えていったのだと思います。人工的なもので囲まれ、環境の厳しさやリスクと向き合わなくてすむようになったことが大きい。世の中が便利になり成熟社会になるほどその傾向は強くなります。今の日本社会など、その典型ではないでしょうか。そんな中、世の中で真実を語り平和活動に力を注いでいる人を見ると、知性や理性が優れていると同時に、この直観力を働かせている人が多いように感じます。

（仲條拓）

★発行所 石原莞爾平和思想研究会

〒179-0076 東京都練馬区土支田3-46-7

山崎行政書士事務所内

TEL(FAX兼用) 03-3925-2353(山崎)

郵便振替 00130-9-410942

発行人 仲條拓躬

編集人 「永久平和」編集委員会

定価 200円（送料別）

会費(年間) 篤志会員 10000円以上

一般会員5000円、誌友会員4000円

第134号 平成27年(2015年)10月25日発行